

偏屈者（へんくつもの）を労（いたわ）ってくれる人

————— 木内昇『新撰組 幕末の青嵐』を読む

図書館係 阿部健治

昨年12月のある日の放課後、読書好きでよく図書館にも来る一人の3年生が、「先生、これについて書いてください」と言って一冊の本を持ってきた。その本が副題にも掲げた木内昇（きうちのぼり）の『新撰組 幕末の青嵐』である。この作者、名前の字面からすると男性のように思えるが、名は「のぼる」ではなく「のぼり」と読み、女性作家である。木内は2011年に『漂砂のうたう』で第144回直木賞を受賞した実力作家だが、その頃、あまり真面目に読書していなかった筆者は寡聞にしてよく知らなかった（要反省だ）。その木内の鮮烈なデビュー作が、2004年に発表された、この『新撰組 幕末の青嵐』なのである。

「新撰組」と言えば、局長の近藤勇（いさみ）、副長の土方歳三（ひじかたとしぞう）、そして、結核という宿痾の病で若い命を散らした悲劇の剣士沖田総司らがあまりにも有名で、今や多くの小説、映画、TVドラマ、更にはコミック等にまで登場して大モテのキャラクターだが、かつてはそれほど知られた存在ではなかったらしい。彼らを世に知らしめたのは1964年に世に出た、司馬遼太郎の『燃えよ剣』（土方が主人公）と『新撰組血風録』（新撰組についての連作短編15編）である。この頃の司馬は恐るべき馬力で書きまくっており、これまた「国民の坂本龍馬像」を確定させたとも言える『龍馬がゆく』（1963-1966.）や下克上の代表である斎藤道三とその女婿織田信長の二代を描いた『国盗り物語』（1965-1966）なども上梓している。後者は筆者が中学二年生の時の愛読書で、五、六回繰り返して読んだ記憶がある。その中に、後の道三こと松波庄九郎が京都の油屋の後家を有馬温泉に連れ出して誘惑するシーンがあったのだが、同級生に「すげえんだ、ここが」などと騒いでいたら、謹厳な担任の女性国語教師に取り上げられたこともあった（今から思うとどうということもない描写だが、当時の中学生にはとっても刺激的だったのだ）。司馬遼太郎は晩年になると、小説家というより文明史家に近づいていった感が強く、『空海の風景』（1973-1975）や西郷隆盛らを描く『翔ぶが如く』（1975-1976）などでは、小説は彼の史観（よく「司馬史観」と言われる）を盛る器のようになった。それはそれで味わい深いのだが、少々寂しくも思う。何しろ1965年ころの彼の作品は、世間にあまた存在するストーリーテラーたちをすべて薙ぎ倒し、蹴散らしてしまうというくらいの勢いで、滅法面白かったからである。

木内も『燃えよ剣』を読んで、その面白さにひっくり返ったクチだろう。それで土方歳三に傾倒し、彼について自分なりにいろいろと調べたのだろう。そうこうするうちに自分（だけ）の土方が描きたくなった…。デビュー作に「新撰組」を選んだ経緯はそんなことだったのではないか。

木内がすごいのは、それが独善的にならなかったことだ。『新撰組 幕末の青嵐』は他の小説とは大きく違った構成をとっている。全体が「遠景の光」（京に上る前のこと）、「足下の薄氷」（初期新撰組の危うさ）……といった六章に分けられ、それぞれが6～10人ほどの異なった登場人物の視点で別々に描かれていくのである。つまり、上京する前、土方は、近藤は、沖田はそれぞれ自分自身をどう見ていたのか、それが列挙され、次々に積み重ねられていくことになる。

このことにはどんな意味があるのか。多くの視点から描かれるので、人物は自ずと立体的になる。土方自身が見る土方、近藤が見る土方、沖田が見る土方、それらはもちろん似通ったものではあるが、微妙に異なる部分もある。これは、音楽で言えば、数多くのスピーカで聴く（音声多重）ようなものである。音楽の批評などでもよく「音が立体的になった」などと言うではないか。

こういうやり方は、「似て非なるもの」を際立たせるのに向いている。「新撰組」はもともと剣技に優れた者の集まりだが、その中でも特に腕が立つのは齋藤一（はじめ）、永倉新八、沖田総司の三人だろう。彼らにとっては、いかに剣技を磨くか、いかにそれを生かすかが第一義なので、新撰組の中で成り上がろうといった野望は（あまり）持たない。では彼らは皆同じかと言うとそうでもない。沖田は病のせいもあるが、名利への思いはゼロで、ただ「純」な人を感覚的に嗅ぎ分けて近づいていく。面白いのは沖田が土方と山南敬助の双方に慕い寄っていったことだ。土方と山南は犬猿の仲である。山南は博学の上に気がよくて人をそらさない所があり、そういう所がいちいち土方の気に触るのだ。果断をもって鳴る土方は、山南が優柔不断な面を見せるとすぐに噛みついていくのである。新撰組を結成してから万事を取り仕切っていた土方は、山南を「総長」という閑職にまつり上げ、実務から遠ざけた。自らが無用者であることを悟った山南はわざと脱走して、土方に自分への切腹を命じさせる。沖田はたんとと両者に接し（どっちも好きなのだ）、万感の思いで山南の切腹を見届けるのである。

沖田と比べると、齋藤と永倉の違いはかなり微妙である。ともに土方に深く信を寄せていたと思うが、永倉には納得できないことについては黙っていられない癖があった。だから土方も永倉が文句を言いそうな仕事はあえてやらせなかった。それと比べると、齋藤はすべて訳知りという感じで土方に従った。後に新撰組に入ってそれなりの勢力を作った伊東甲子太郎が、仲間を引き抜いて出て行き、「御陵衛士」という新集団を作った時も、齋藤は躊躇なくそこに加わり、土方のスパイという汚れ役を引き受けた。齋藤には「義がいずれにあるか」よりも「（たいへんな）任務の遂行」を自らの使命とし、それを喜ぶという風があった。恐らく土方と最も相性がよかったのは齋藤だろう。

木内は清河八郎や芹澤鴨といった、新撰組前史、または新撰組初期に関わった人物で、ドラマなら早々に退場しそうな者たちにもそれなりの紙幅を割き、彼らの面目が立つようにしてやっている（司馬の小説では印象に残らなかった彼らの立場が木内のを読んだらよくわかった）。こういう中立的な姿勢は全体を俯瞰しやすい構成の賜物とも言えるが、筆者には「どんな人にもそれなりの存立基盤はあるはずだ」という彼女の信念の発露だと思えた。木内は「世をすねた人（偏屈者）」が好きで、彼らに向ける労りの目というものがあるが、筆者にはそれが何とも好ましい。清河八郎や芹澤鴨も大きく言えばこの範疇に入ってくるだろう。

ただ、そのように努めていても、やはり彼女にとっての一番は土方である。彼女の描く土方は、新撰組を引き締めている時期は鬼となっていたが、戊辰戦争に突入するとすごく柔らかく優しくなる。ああ、これはツンデレなんだなと筆者は思った。土方とはまわりのすべての人々に対して等しくツンデレな人。これが描きたかったんだ。そう思った。この本に書かれているのはもちろんすべて史実に基づいているだろうが、どの資料を捨てどの資料を拾うかで人物の印象は大きく変わる。あれほど公平に、冷静にすべての人物を見ようとしていた木内が、主人公とも言える土方歳三に対しては、少しだけ冷静さを欠いたのではないだろうか。もちろん、木内が提出したナイーブな土方も十分に魅力的である。そして、多摩地方の田舎臭さ（『燃えよ剣』では冒頭で「蝮臭い」と表現される）や男臭さを身にまとった、司馬が描く土方像もまた魅力的である。足女生の諸君も、この機会に、歴史的人物の中でも屈指のイケメンとされる「土方歳三」の本当の姿をそれぞれに探してみたらどうだろうか。